

地域連携による生態学教育プログラム「人と自然と生態学」2

岩手生態学ネットワーク

松政 正俊¹⁾・三上 修¹⁾・牧 陽之助²⁾・松木 佐和子²⁾・東 淳樹²⁾・竹原 明秀²⁾
島田 卓哉³⁾・柴田 銃江³⁾・中村 克典³⁾・杉田 久志³⁾・吉田 信代⁴⁾・本城 正憲⁴⁾
鈴木 まほろ⁵⁾・小山田 智彰⁶⁾・山内 貴義⁶⁾・前田 琢⁶⁾・煙山 彰⁷⁾
由井 正敏⁸⁾・平塚 明⁸⁾・島田 直明⁸⁾・金子 与止男⁸⁾・占部 城太郎⁹⁾

A Regional Educational Program for Ecological Minds 2: “Human, Nature and Ecology”

Ecology in Iwate Network : EINET

Masatoshi Matsumasa, Osamu Mikami, Yonosuke Maki, Sawako Matsuki, Atsuki Azuma, Akihide Takehara, Takuya Shimada, Mitsue Shibata, Katsunori Nakamura, Hisashi Sugita, Nobuyo Yoshida, Masanori Honjo, Mahoro Suzuki, Tomoaki Oyamada, Kiyoshi Yamauchi, Taku Maeda, Akira Kemuyama, Masatoshi Yui, Akira Hiratsuka, Naoaki Shimada, Yoshio Kaneko, Jotaro Urabe

1. 目的・方針

本プログラムは「自然との共存を求める社会の基盤づくりに寄与すべく、自然を科学的に理解し、かつ愛おしむ心を持つ人材を数多く育てること」を目的として2008年度に開始し、2009年度は3回の市民講座を実施した。その際には、前年度に引き続いて北東北地域の自然の特性や人々の生活に関連の深い生物についてのテーマを選ぶことにより、市民の興味を高め、その生態学的な理解を促すとともに、地域に根を下ろした研究活動の重要性も訴えた。

市民講座では、受講生と地域に暮らす生態学の専門家との交流を重視し、講座の内容、講演時間、構成、実施場所などについてのアンケート調査を実施して、その結果をもとに次の市民講座のテーマや実施形態を決定した。また、講座に引き続いて自由参加の討論会も開催し、生態学の専門家、自然保護活動や環境保全に関わる人々、農林水産業に携わる人々、および一般市民が自由に、かつより深く議論できるよう工夫した。

2. 活動内容

盛岡市および周辺の市町村を中心とする岩手県を対象地域とし、3回の市民講座を実施した。市民講座のテーマ・講座内容は、上述のようにアンケート調査によって集めた受講者からの声をもとに設定したが、同時に、生態学的に重要な概念や、地域の自然保護にとって重要な視点が理解できるようなものとした(表1)。

話題提供者は、市民講座の約3ヶ月前までに決定し、話題提供者からの写真を使用して広報のためのチラシを作成した(図1)。このチラシは市民講座の1ヶ月ほど前には県内の公的施設や高等学校等に配布すると同時に、過去の市民講座におけるアンケート調査等でダイレクトメールによる案内を希望した個人および団体には直接送付した(約400件)。さらに、ホームページ(<http://biology-ec.iwate-med.ac.jp/REPFEM.html>)にはチラシ画像とともに講座の概要を掲載し、盛岡市の広報誌や商用の情報誌を通じての広報も行った。なお、これらの広報は岩手県および盛岡市の教育委員会、岩手県立博物館、岩手

1) 岩手医科大学 2) 岩手大学 3) 森林総合研究所東北支所 4) 東北農業研究センター 5) 岩手県立博物館
6) 岩手県環境保健センター 7) 岩手県水産技術センター 8) 岩手県立大学 9) 東北大学

県水産技術センター、森林総合研究所東北支所、岩手大学、岩手県立大学および岩手医科大学の後援を得て実施した。

市民講座の1～2週間前には、話題提供者と生態学ネットワークのメンバーによる検討会を実施し、専門的な内容を平易に説明するため、構成や話し方についてのブラッシュアップを行った。また、市民講座の後には、アンケートへの回答を参照しつつ反省会を行い、次に向けての改善点等を洗い出した。

3. 成果・検討

参加者は第3回が約130名（写真1）、第4回および第5回が約100名であり（写真2、3）、第4回のアンケート調査結果によると、参加者の75%が2回以上の参加者、すなわちリピーターであった（図2）。スライドの見やすさや、それぞれの話題・総合討論等の時間配分についての質問に対しては、90%以上の参加者が「見やすい」および「適当である」と回答しており（図3）、初回から継続している見直しが功を奏していると思われる。また、参加者から希望をとり、市民講座のチラシを希望する個人・団体に直接郵送

するという周知方法もリピーターの確保に大きく寄与していると思われる。一方、初回参加者（全体の25%）の中には高校生などの若い世代の参加者も見られ（図2、写真3）、高等学校や公民館などの公的機関を通しての広報も継続していくことが望ましいと考えられる。参加者の年齢層は10～30代が15%、40～50代が35%、60代および70代以上がそれぞれ20%および30%程度であり、若い世代の参加が少ないが、それぞれの話題の後の質疑応答は極めて活発であり、参加した若い人達の刺激になったと思われる。このプログラムの効果を継続して社会に浸透させていくためには、今後さらに若い世代の参加を促す工夫が必要であると考えられる。講座終了後に実施した自由参加の討論会には、第4回、第5回ともに20名ほどが参加し、一般の参加者、話題提供者、および岩手生態学ネットワークのメンバーが、より緊密に意見を交換することが出来た（写真3;下段右）。ただし、一般市民にとっては、やや参加しにくい雰囲気だと思われるので、今後はもう少しリラックスして議論を交わすことができる環境を整えるべきであろう。

表1 これまでに実施した市民講座のテーマ・講座内容
第1、2回は2008年度、第3～5回を2009年度に実施

第1回「生き物からみた岩手の自然」(2009年1月25日)	
1)北東北の渚と生き物たち	松政正俊(岩手医科大学共通教育センター)
2)岩手の森の木の話	柴田鏡江(森林総合研究所東北支所)
3)放牧で維持する草原のチョウ:北上山地安家森	吉田信代(東北農業研究センター)
4)田んぼで守る北限のメダカ	東 淳樹(岩手大学農学部)
第2回「野の花をめぐる生き物のつながり」(2009年6月14日)	
1)虫をあてにしない花たち	平塚 明(岩手県立大学総合政策学部)
2)サクソウのタネが実るためには	本城正憲(東北農業研究センター)
3)湿原の花と虫たちのゆるやかな関係	鈴木まほろ(岩手県立博物館)
第3回「森を食べ、森とともに生きる動物たち」(2010年1月30日)	
1)食べられないための工夫ードングリの場合、そして野ネズミの対抗手段ー	
	島田卓哉(森林総合研究所東北支所)
2)普通の虫が普通でなくなる前にー日本最大級の蛾クスサンの場合ー	
	松木佐和子(岩手大学農学部)
3)松を食べるだけなら「松くい虫」にはならなかったー100年前、マツノマダラカミキリに訪れた転機ー	
	中村克典(森林総合研究所東北支所)
第4回「植物からみた人の営み」(2010年6月13日)	
1)フクジュソウはどんな場所に生えているか?ー農村の人の暮らしとの関わりー	
	島田直明(岩手県立大学総合政策学部)
2)人の営みが作ってきた北上山地の森林	
	大住克博(森林総合研究所関西支所)
第5回「見えない世界の生態学」(2010年9月20日)	
1)鉄と硫黄と微生物ー「いろ」で読む「おんせん」の生態学ー	
	牧陽之助(岩手大学人文社会科学部)
2)菌に頼って生きる植物ー植物の根で展開する菌根菌との共生関係ー	
	横山潤(山形大学理学部)



図1 本年度に実施した市民講座のチラシ。左から第3回、第4回、および第5回。

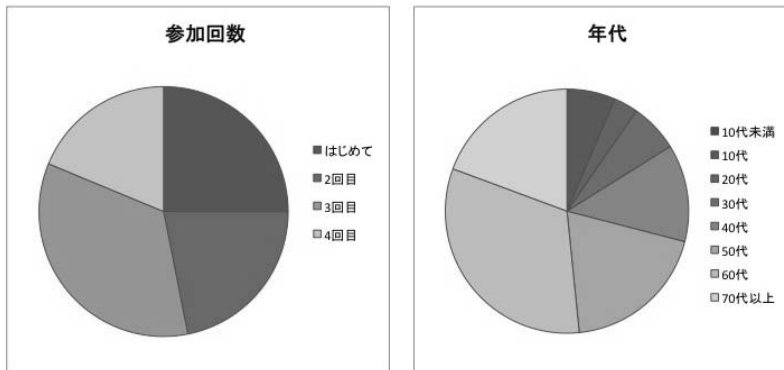


図2 市民講座4アンケート結果 (参加回数と年代)

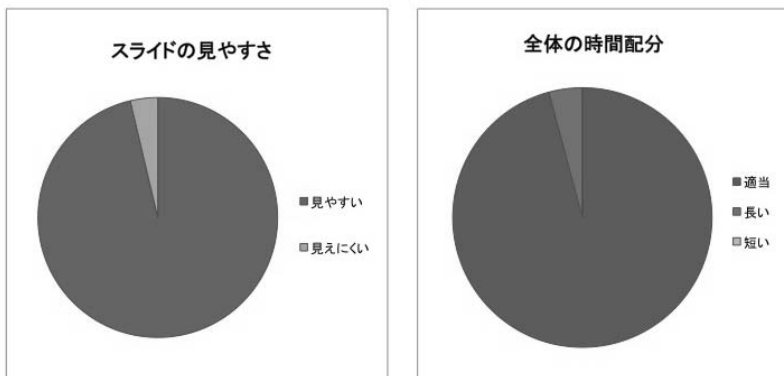


図3 市民講座4アンケート結果 (スライドの見やすさと時間配分)



写真1 第3回市民講座の様子



写真2 第4回市民講座の様子



写真3 第4回市民講座の様子（下段右は自由参加の討論会）